

第1期京都市多文化施策懇話会 平成23年度第2回会議摘録

日 時：平成23年9月27日（火）午後2時～

場 所：京都市役所 E会議室

議 題：「支えあうコミュニティ」

出席者：京都市多文化施策懇話会第1期委員9人

（欠席委員：神崎委員，十倉委員，水鳥委員）

京都市総合企画局国際化推進室5人

京都市国際交流協会1人

傍聴者：3人

次 第：（1）開会

（2）中間提言「災害時における外国籍市民等への支援策」について

（3）審議「支えあうコミュニティ」

・奥山イク子委員報告

・意見交換

・陳正雄委員報告

・意見交換

（4）閉会

1 開会

2 中間提言「災害時における外国籍市民等への支援策」について

<座長から>

- ・京都市多文化施策懇話会中間提言「災害時における外国籍市民等への支援策について」

<事務局から>

- ・「京都市の防災対策総点検委員会 中間報告」について
- ・京都市・京都市国際交流協会の外国籍市民等に向けた防災の取組について
（今年度の新たな取組を中心に）

3 審議「支えあうコミュニティ」

<奥山イク子委員報告「中国帰国者支援活動について」>

- ・中国帰国者について

小栗栖地域の帰国者：一世が76名，二世，三世も含めると約600名が在住。

高齢で日本に戻ってきた帰国者にとって，生活上もっとも大変なのは日本語学習である。

- ・小栗栖日本語教室について

地域のボランティア，京都市国際交流協会，日中友好協会の協力を得て発足（平成10年）

課題：地域のボランティアが少ない

運営する事務局スタッフの高齢化と後継者不足

今後：若い世代（帰国者二世，三世）に，きちんと日本語を学び，地域との連携を深めて，日本語教室の運営を担っていてもらいたい。

- ・中国帰国者支援活動

日本語教室の運営だけでなく、広く中国帰国者支援を行ってきた（医療通訳、福祉・教育・住宅への入居手続等）

- ・中国帰国者の防災の取組

帰国者の多くは日本語が話せず、災害時に支援が行き届きにくい。緊急時に備えて、小栗栖地域在住の中国帰国者の名簿を作成する予定（氏名、住所、電話番号と避難場所を記載）

<意見交換>

陳 委 員：いまでも中国帰国者の方々は増えているのか？また、「若い世代」の帰国者という、年齢は？

奥 山 委 員：現在では、新たに永住帰国する人は少ない。一時帰国の人ほとんどである。若い世代といっても、40歳代の二世・三世である。

重 野 委 員：中国帰国者が抱えている課題、問題があれば伺いたい

奥 山 委 員：ボランティアの先生が足りない。日本語教室の一環として、パソコンの使い方を教えているが、そういったことまで教えられるボランティアは少ない。

金光敏委員：地域との関係で苦労したことは？

奥 山 委 員：日本語ができないことで、地域とトラブルが発生することはある。中国帰国者は日本国籍だが、言葉も文化も中国である。地域の方から見れば「中国人」と映る。ゴミの出し方等をめぐって迷惑をかけることも多い。以前に比べれば、地域との関係は良くなっていると思う。

小 川 座 長：行政との関係で苦労することは？

奥 山 委 員：10年ほど前のことだが、ある中国帰国者が生活保護の担当者から心ない言葉をかけられ、私も一緒に行政と話し合いをしたことがあった。その後、行政の側でも中国帰国者についての理解が進み、関係も良くなってきたと思う。

吉 村 委 員：日本語教室の運営で、特に子供に教える際に苦労することは？

奥 山 委 員：日本語教室ボランティアの先生には、退職された元教師の方が多い。教室発足以来、小学校の元先生に子供クラスを担当してもらい、うまく行っている。

小 川 座 長：京都市では、公立の小中学校に在籍する中国帰国者児童の数は把握しているのか？

京 都 市：平成19年に教育委員会が「外国籍及び外国にルーツをもつ児童生徒に関する実態調査」を実施している。その後のデータの有無について確認する。

小 川 座 長：厚生労働省は、「中国残留邦人等に対する支援策」の一環として「地域社会における生活支援等」を掲げている。小栗栖の日本語教室のように地域、ボランティアの力で日本語教室を行っているのは尊いことだが、行政としても様々な取組を行おうとしている。「中国帰国者の会」というNPO法人からも自治体に向けて要望が出されている。京都市へ提言・要望等があればどうぞ。

奥 山 委 員：日本語教室の実施場所が不足している。現在は小栗栖団地の集会所を利用しているが、この集会所は、小栗栖地域以外の帰国者向けの日本語教室には使えない。今後、中国帰国者の一世は高齢化がますます進んでいく。そこで、次世代の二世、三世が一世を助けていく仕組みが必要だ。

<陳正雄委員「京都市内で生活する中国籍、もしくは中国にルーツのある市民について」>

・歴史的経緯

1972年の日中国交回復前には、京都の中国籍市民は1,000人に満たなかった。その後、ニューカマー（新華僑、留学生等）が増加し、現在、京都市内には約10,000人の中国籍市民が在住している。

・中国籍・中国にルーツのある市民の4つのグループ

→老華僑、新華僑（留学生含む）、中国帰国者、台湾出身者

中国籍・中国ルーツの市民と言っても、互いに母語も文化的背景も異なる。

・老華僑と中国帰国者

戦前から日本にいる老華僑と、戦後に日本へ戻ってきた中国帰国者との間に、ほとんど交流がない。日本で生まれ育った老華僑は、中国籍だが言葉や文化は日本。逆に中国帰国者は日本国籍だが言葉や文化は中国。言葉や文化の壁は大きい。

・老華僑と新華僑（ニューカマー）との交流

日本で生まれ育った老華僑は、日本社会に溶け込んでいる。新華僑（ニューカマー）については、グループの中から、助け合って生活するためのコミュニティをつくる人間が出てこないといけない。

<意見交換>

ウリヤナ委員：ニューカマーで、たとえば厳しい労働条件で働いている中国籍の方もいると思うが、こういった方の状況については？

陳 委 員：私自身はよく知らない。ニューカマーを支援する組織の方が詳しいのでは。

小川 座 長：老華僑と、こういったニューカマーの中国人労働者とはつながりはないのか？

陳 委 員：連携や、支援しようという動きもあまりない。私たち老華僑は、多くは中国語が話せず、新華僑、ニューカマーと関るのは難しい。それでも中国の文化、伝統は大事にしている人が多いし、多くは中国籍のまま日本に暮らしている。

小川 座 長：韓国・朝鮮籍の方が語られると、差別の問題や参政権などの事柄が出てくるのだが・・・。行政に対して、要望等はないか。

陳 委 員：たとえば参政権についてだが、あくまで私個人の考えとして言わせてもらえば、昔から華僑には外国で政治運動をしない、という中国本国の伝統、教えがある。住んでいる国では内政不干渉を貫く、それが共存・平和につながるという考え。差別問題については、留学生や外国人についての理解は、まだまだ進んでいないと思うことが多い。

小川 座 長：中国籍、中国ルーツの市民の方々にも4つのグループがある、という指摘は重要だと思う。そういった人たち相互の関係も重要であり、そういった人たちと、他の市民、地域との関係も重要だ。

4 閉会

京 都 市：本日も委員の皆様から色々と勉強させていただいた。懇話会会議は時間的制約もあるが、今後とも様々な場で交流ができるとありがたい。